

石川達夫

『プラハのバロック ——受難と復活のドラマ』

(2015年、みすず書房)

本書は、ヨーロッパにおけるバロック文化の拠点の一つであったプラハとチェコのバロック文化の豊かさと個性について、日本で初めて明らかにした研究書である。

チェコ王・神聖ローマ皇帝カレル4世を中心とする時代にゴシック文化が栄えたチェコでは、宗教改革の先駆者ヤン・

フス(1370頃-1415)を主導者としてフス運動が広がり、約200年間にわたってフス派とプロテスタントが優位に立った。しかし、イエズス会を中心として巻き返しを図ったカトリックとプロテスタントとの確執が高じ、1618年にプラハから30年戦争が始まった。その初期にプロテスタントが大敗を喫したチェコでは、カトリックのハプスブルク家の神聖ローマ皇帝によりプロテスタントの信仰が禁止され、苛烈な対抗宗教改革が推し進められた。知られているように、カトリック教会は対抗宗教改革を推進するに当たって積極的にバロック芸術を利用したが、約200年間にわたるフス派とプロテスタントの強力な伝統に対抗して再カトリック化を推し進めるために、チェコでは対抗宗教改革も強力なものとなり、数多くのバロック様式の芸術作品が創り出された。

しかしながら、長年にわたる諸宗派の共存やチェコ王・神聖ローマ皇帝ルドルフ2世が發布した「信教の自由に対する勅許状」(1609年)によって個人のレベルでの信教の自由が認められていたチェコでは、宗教的状况も複雑であり、夫婦・兄弟姉妹・親戚・友人などの中に異なる宗派の者がいることがあり、彼らの絆を引き裂く悲劇も起きた。また、チェコ王国はドイツ系のハプスブルク家に従属して独立を喪失し、ドイツ化が進んだことは、カトリックのチェコ人にとっても敗北となった。そのため、カトリックの勝利は手放しの勝利とはならず、勝利が同時に敗北や悲劇ともなった。そして、それを反映してプラハとチェコのバロック芸術は、勝ち誇り酔い痴れるよりも、受難と悲運に耐える陰影を持つことが特徴となった。また、ゴシック時代以降、宗教戦争が長引いたチェコではルネサンス様式はあまり広まらず、チェコに広

範に根づいていた強力なゴシック様式の影響が長く続いたため、ゴシック様式とバロック様式が融合したような独特の「バロック的ネオ・ゴシック様式」も生まれた。こうしてチェコでは、イタリアやスペインなどのバロック文化とは異なる、チェコ独特のバロック文化が生み出されたのである。

本書は、チェコの劇的で複雑な歴史の襞に分け入り、豊富な図版・写真を用いて、プラハのバロック芸術の傑作を具体的に分析しつつ、ヨーロッパの代表的なバロック都市の一つであるプラハのバロックの全体像を明らかにすると同時に、その独自性をも明らかにしている。

